

# ベルクソンにおける「私」

小関 彩子

はじめに

我々にとって自らの存在を問うことは常に大きな問題である。私とは何か、私が自己自身であるとはいかなることなのであるか。この大きなテーマに対峙するに当たり、我々はベルクソンにおいて生ける私としてとらえられた自我の姿をその足掛かりとする。

先に自由の問題を行為論において究明した拙論において筆者はベルクソンにおける自我論を、自由に行為する私という観点から取り上げた。(1)ベルクソンは「自由に振る舞うこと、それは再び自己自身となることであり、純粹持続の内に戻ることである」(Essai 174)と定義する。すなわち、行為するに当たって自己以外の何ものにも拘束されず、自己自身

のみによって決定する自我こそが真の自己であり、それゆえ自由だと考えるのである。

この自我をベルクソンは内的自我と外的自我の二つの aspects に分類する。先の拙論ではこの aspect に、「様相」と「局面」という二義性があることを指摘した。後者においては、自我のより内的な部分とより外的な部分とが区別されるのであるが、前者においては、自我の認識の仕方が区別される。すなわち、ベルクソンによれば我々の自我を、もし外的様相によって分析する決定論によってではなく、内的様相においてとらえるならば、具体的で、現実の自我が持続し、行為を生む様を明らかにすることが出来る。この解釈に立てば、我々の行為は全て唯一の自我に由来し、従って常に自由であることになる。しかし自我に由来しない自由ではない行

動もあることをベルクソンは認め、そのような行動を身体に位置づける。

ところがまた別の箇所においてはベルクソンは、自我と身体・世界との相関の可能性を保持するために、自我に世界と関係して行動を生む外的 aspect を認める。これは唯一の自我を表象する様相ではなく、自我の一面面であると解釈しなければならぬ。自由ならざる行動を生じさせる外的自我は決定論を許容しており、そこでは真に自由な行為を創造する自我が未だ自己ならざるものによって拘束されている。ここに行爲の主体である「私」を置くことは出来ない。

この表層の外的自我に対置されて真の自我であると考えられているのが、奥底の内的自我である。自己以外の何ものにも制限されず自己自身であると考えられている内的自我は、真に自由である。しかしながらそれは行動の必要からも解放されているからこそその自由である。我々の真の自我が存在するはずのこの局面は、それゆえ我々が我々自身である局面、我々が最も自由な局面であるが、しかしまたそこは行為から最も遠い局面でもあるのだ。この二つの aspects の錯綜が、我々が真に自己自身であり、かつ現実に行爲することを可能にしてしまっているのである。

## 1 人格の表象——新しい問の提起

それでは、私ではないいかなるものからも区別されて自己

自身である私の真の姿を解明することは出来ないのであろうか。ベルクソンが様々な aspect によって分析した、そのような自我を有した私というものの全体像とはどのようなものであろうか。この問を今一度問題とすることが、本論文の目的である。そのために我々が注目するのが、*personne* という概念である。ベルクソンは人格・人格性という概念を主題的概念として明示的に思索の対象にはしていない。しかし、私というものの全体像を明らかにするために、現象学で用いられる所の所謂操作概念<sup>(2)</sup>として、この概念を導入することが有効であると思われる。多くの場合ベルクソンは、自我と人格をほぼ同じ意味で使用してゐる。(Cf. PM197)

行為が全人格から発し、行為が人格を表現する場合、我々は自由なのだ。自我のみから発する全ての行為を自由と呼ぶことに合意すれば、我々の人格の印を身に帯びている行為は、真に自由である。(Cf. Essai129-130)

*personne* とは一般に、自我や個性を有した一つの人格、身体をも含む一人の個人と考えられている。自我の諸相をも包摂して今ここに在る、この私を問うために、本論文において我々はベルクソンにおける人格概念を追ってみたい。

ベルクソンは人格を、私以外の何ものからも区別された独自性という観点から特徴づける。我々の唯一の自我、具体的

で現実の自我の姿とは、絶対に他者とは置き換えることの出  
来ない唯一無比の主體的自我、全く独自の、私に固有の自我  
であると考えられているのである。このような人格は、「既  
知の共通な用語では表現することの出来ない、あの人格に特  
殊な色調」(PMI90)を帯びている。この私に特有の色を把  
握するために従来試みられて来た様々の分析からは、真の成  
果は得られないとベルクソンは批判する。それらは自己に固  
有の人格を、自己以外の世界と共通性を持った非人格的なも  
のから理解しようとするものであつて、その分析をより精緻  
に積み重ねて行くという方向には、人格の真の姿は現れ出  
ては来ないのである。

例えば我々のある決意を説明しようとする際、その原因を  
我々が置かれた環境や社会状況、法や道徳規範に求めること  
は、通常行われることであろう。しかしながら、それらの  
我々を取り巻く我々ならざる諸要因が不可避的に我々をして  
決意せしめるとは考えられない。なぜならば、それらの諸要  
因の影響下にあるにせよ、決意を為すのは、あくまで我々自  
身なのである。それでは、それらの諸要因が我々の意識の内  
に形成した動機が決意の理由であろうか。しかしベルクソン  
は、自我を様々な心理的狀態に分類し命名することに、自我  
の解明の可能性を認めない。彼は「我々が最も強く固執する  
意見とは、最も説明しがたい意見である」と考える。我々が  
ある意見に価値を認めるのは、その意見の持つニュアンスが

我々の他のあらゆる觀念に共通の色調に呼応しており、我々  
は最初からそこに我々自身の何かを見ていたからなのである。  
(Cf. Essai100)

決定論が前提とする連合説は、自我を感覚・感情・觀念な  
どの意識の諸事象の集合に還元するのであるが、それらの諸  
狀態の内、それらの名が表しているもの、すなわちその非  
個人的な面しか見ないのであれば、それらを併置すること  
で得られるのは幻影的的自我に過ぎない、とベルクソンは批判す  
る。反対に、これらの心理狀態が特定の人物の内帯びると  
ころの色彩、また他の全ての心理狀態の反映から諸狀態のそ  
れぞれへと到来する特殊な色彩、そうした色彩を伴つたまま  
それらの心理狀態を取り上げるならば、それらの狀態の各々  
の中に人格は全面的に存在する。この内的狀態の外部への現  
れこそ自由行為であるとベルクソンは主張する。なぜならば  
自我だけがその狀態を創造したのであり、その現れは自我全  
体を表現しているからである。(Cf. Essai124-125)

このように豊かな色彩を持った我々の人格に、連合説は自  
己以外の世界との共通性という外的「様相」を適用し、「意  
識狀態に外的事物の相互外在性を分有させるという錯覚」  
(Essai173)を犯す。この諸狀態は、我々が自我の外部へ立  
場を移し、人格について「一連のスケッチ、略図、記号的、  
図式的な図形を作ること」(PMI94)によってのみ得られた  
ものなのである。このような様相は「純粹持続が等質的空間

に投ずる影、言わば社会的な表象」(Essai174)であり、「真の持続の外延的記号」(Essai95)に過ぎない。ベルクソンはそれを「はつきりしていて、明確だが、非人格的」(Essai96)だと批判するのである。

このように人格を非人格的な共通性に解消する要因として、ベルクソンは言語を挙げ、独自の言語観を背景にこれを批判する。

知覚・感覚・情動・觀念の〔内的〕様相は不明瞭で無限に流動し、表現不可能である。言語は内的で生きた心理事象の動きを固定化することなしにはそれをとらえ得ず、またそれを共通の領域の中に落とし入れることなしには、限り、自らの月並みな形式にそれを適合させることも出来ない。(Essai96)

はつきりと定まった輪郭を持った言葉、人類の持つ印象の内の安定していて、共通しており、従って非人格的なものを蓄えておくありのままの言葉が、個人的意識の持つデリケートでとらえがたい印象を押し潰すか、あるいは少なくともそれを覆い隠してしまう。(Essai98)

結局、外的様相によって得られるのは、「我々自身の影……生気を欠いていて、言語に翻訳可能な諸状態、社会全体によって与えられたある事件の中で感じられる諸印象の内の共通

な要素、従って非人格的な残滓」(Essai99)なのである。

これに対して、我々にとつて外的な存在を理解し得ないとしても少なくとも我々は、「時間の内を流れている我々自身の人格、持続している我々の自我をとらえることが出来る」(PMI82)はずであるとベルクソンは考える。「自我そのものによって自我の持続を内面的、絶対的に知ることは可能である。」(PMI90)我々は、生成変化する世界の中で、己が生きていることを自覚している。しかし生成変化の内的法則がいかなるものであるのか、直接には知り得ない。唯一の直接知り得る存在は、我々自身である。我々自身の姿を、自己を非自己の内に抽象する言語によって単に分析するのではなく、人格を内部から直観するならば、すなわち持続であるところの私という一個の人格を、持続しない世界と混同することなく、内的自我という様相において把握するならば、唯一の自我を明らかにすることが出来ると考えるのである。

## 2 持続する人格

さて、前節までの議論においてはベルクソンは、我々の人格に対する表象の方法を問題の場としていると考えられた。その結果、私とは持続であるところの自我、物質世界との関係から完全に解放された唯一の自我に等しいのであり、そのような自己自身を内的様相によって直観することが出来ると結論づけられた。

ここで考えなければならないのは、自己を非人格的に把握しようとする私、あるいは反対に持続の相の下に見ている私の私とは誰か、そしてまた、そのようにして把握される私とは誰か、そしてまた、そのようにして把握される私とは誰か、という問題である。ベルクソンが指摘した内的自我と外的自我を唯一の自我に対する単なる認識方法と解釈するならば、それらは全て、我々の唯一の自我そのものであると考えなければならぬ。

たいていの場合我々は、自己自身の人格に対して外的に生きかつ行動している。反省の力強い努力によって、我々に付きまといつている影から目を転じて自己自身の内に立ち戻る時はいつでも、この自我を認め、純粹持続の中に戻ることが出来る。(Essai175)

ここで述べられている「自己自身」と、その自己自身に対して外的に生きている「我々」とのいづれに私というものを置くべきなのであろうか。ベルクソンは「区別のある諸状態を認める自我も……これらの状態が……互いに溶け合うのを見る自我も、同じ自我なのだ」(Essai103)と云う。自己を内的様相において見る自我も、外的様相において見る自我も、いづれも自我であり、しかもそのようにして見られるているのもまた自我なのである。

ここまでの議論においては、自我が諸相において把握され得るとしても、把握されるべき我々の自我については、それは唯一の自我であり、すなわちそれが我々の人格であると考えられていた。しかし、このような人格は、純粹持続する自我に等しく、自我ならざるものからは完全に峻別されるものでもあつた。ところがベルクソンは、ある場合には我々の自我が外的世界と関係し得ることを認めるのである。ここから、先の拙論で指摘したように、見られているほうの自我に二つの、あるいは段階的な局面があるとベルクソンは考えるようになる。すなわちより自己に固有の持続する内的自我と、より世界に侵食された外的自我との二局面である。

この外的自我とはどのようなものと考えられているのであろうか。ベルクソンによれば「我々の自我はその表面では外的世界に触れている」(Essai193)であり、自我のこの部分は「心理事象の外皮」(Essai126)、「第一の自我を覆う第二の自我」(Essai103)である。それでは、この二つの局面を保持した自我の、どこに人格を位置付けることが出来るであろうか。

結論から言えば、ベルクソンは外的自我に人格が関与していることを否定する。なぜならば「限りなく変動する我々の感情が不動のイメージに結び付き、外界から受けた印象が意識の表層に凝固している観念を動かして、我々の人格が関与しないままに反射行為に似た運動を引き起こす」(C)

Essai126-127) からである。このような非人格的な外的自我に比して、その奥底に存在する内的自我こそが我々自身であるとベルクソンは考え、次のように述べている。

社会と接する表層から深みへと降りて行くにつれて、深層で働いている我々の意識は、より独自の、他人とは通約され得ない、さらには表現不可能な人格性を我々自身に示すようになる。(DS7)

もし我々が表面から中心へと自分を寄せ集め、我々の根底において、最も一様に、恒常的に、持続的に我々自身であるものを求めるならば、一つの連続的な流れを見いだす。

(Cf. PM182-183)

このように描かれた自我の深層、自我の内的局面は、自己ならざるいかなるものとの共通性にも解消されない局面であり、それゆえ真の自己自身が現れ出る局面であると考えられている。

ここで問題としたいのは次の点である。すなわち持続しない物質世界を排除し、その世界と接する外的自我をも排除して、純粹の持続が流れていると考えられているこの内的自我が、それでは真に「私」の自我であると言えるのだろうか。

またそのことはどのようにして確認されるのであろうか。確かに持続そのものにいかなる分節化も施さず、完全にその流

れに熔融した自我は、「真の」持続であると言えるだろう。しかしこの持続は「私の」持続という屬性からも解放された自我、いわば「大文字の自我」とでも言うべきものなのではないだろうか。具体的に生き生きとしたこの私の自我の姿をありのままに直観しようというベルクソンの当初の目論みは、ここに至って、そのような「小文字の自我」をも包含し、熔融した、より上位の自我という問題圏の内に解消されてしまっているように思われるのである。

それでは、ベルクソンは私という一個の人格をついに認めないのであろうか。自己の人格は本来実在せず、あるのはただ持続一般のみであると考えているのであろうか。そう解釈した場合自由とは、自己以外の一切からの自由というよりもむしろ自己からの自由、自己が自己であることからの解放という意味を持つこととなる。次のようなベルクソンの言葉は、我々にこの解釈を示唆しているように思われる。

全てのものを持続の相の下に考え知覚する習慣を多く身につければ、それだけ我々は実在の持続に入り込む。そして入り込めばそれだけ我々は始源の方向へ復帰する。始源は超越的だが、我々はそれを分有する。……この始源の永遠性は……生命の永遠性でなければならぬ。(PM176)

我々は自分の浸っているこの生命の大洋から、絶えず何ものかを吸い上げる。我々は、我々の存在が……一種の局

部的凝固によって、生命の大洋の中で形成されたことを感じる。哲学は、全体の中にもう一度溶け込もうとする一つの努力でしかあり得ない。知性は、自己の始源に吸収されることによって、自己自身の発生を、溯つて再び生きるであらう。(EC192-193)

このように、ベルクソンは人格の本来のあり方を持続への熔融と考えている。それではこのような純粹持続に私という人格を与えてしまうものは何なのか。何が我々に始源を分有させ、生命を凝固させるのか。持続はいかにして個人の持続になるのであろうか。

### 3 身体と人格

持続する内的自我を人格と等置していたベルクソンは、しかしまたある時は人格を内的自我と外的自我を統合したものと考え、「より深いこの自我は、表層的な自我と合してただ一つの同じ人格を成しているのです、これら二つの自我は、必然的に同じ仕方です持続するように見える」(Essai93)とも言うている。この外的自我とは、我々の自我が身体・物質に接する局面である。持続が個体化・現在化する契機となるものとして、この物質・身体を挙げることは出来ないであらうか。この節においては、私に「私」性を付与するものをこの観点から探してみたい。

ベルクソンは物質が「分割するもの、はつきりさせるもの」(ES22)という性質を持つことを指摘する。物質は、潜在的にしか多様でなかったものを、現実に分割する。生命は莫大な潜在性であり、幾千もの傾向の相互侵食である。しかしそれが幾千となるのは、一度相互に外在化された場合、すなわち空間化された場合のみである。(Cf. EC259)「波〔生命の流れ〕が物質を押し流し、その隙間に入り込む場合、物質は波をはつきりとした個体に分けることが出来る」(EC270)のであり、「物質の流れは生命の流れに逆らうが、それでも、後者は前者から何かを取得する」(EC350)。こうして出来たものが有機組織にほかならない。生命の大きな流れから個体という有機体を切り出してくるのは物質によるのであり、このようにして成立するものをベルクソンは人格であると認めるのである。

生命の根源的な躍動のうちに混沌として溶け合っていた諸傾向を、物質は区別し分離し分解して個体にし、ついに人格にする。(ES22)

ここに至って、私ではないものとして排除されていた物質こそが、むしろ私が私であることを保証するものとして考えられることとなる。そして、生命が物質の抵抗に遭って形作ったもの、それが我々の身体である。この身体というイマー

ジュは物質世界のイマージュ一般という全体における部分である。イマージュの総体の内において利害関係のあるイマージュが身体に反射し、知覚が生まれ、行動が準備される。身体とは「感情の座」、「行動の中心」なのである。ベルクソンはこの身体という物質に、私という人格を現出させる役割を認める。すなわち「私の人格（強調ベルクソン）」とはそのような行動を結び付けるべき存在」(MM46)であり、「私はまさにこの特別なイマージュを私の宇宙の中心とし、また私の人格の物理的基礎とする」(MM62)と考えるに至るのである。

このように人格の置かれる場を身体に措定していながら、しかしなおベルクソンは人格を身体を超えたものと考えらる。

我々が各々「私」(moi) (je) という言葉で指示するものとは、自己の身体からあらゆる方向に溢れ出て、空間的・時間的に身体を越えているように見えるものである。空間的には我々は、はっきりした輪郭によって限定された身体を越えて、知覚の機能によって宇宙にまで拡がって行く。また時間的にも意識は過去を保存し、未来の創造に寄与する。(Cf. ES30)

当時の実証的データに基づいて脳を生理学的に検証した結果ベルクソンは、精神を脳という身体に還元することを否定し、

人間の心的活動は脳の活動から溢れていること、脳には体を動かす習慣が蓄積されるが、記憶は脳に蓄積されるのではないこと、その他の思考の機能は記憶以上に脳から独立であることを示し、従って「体が壊れてからも人格性の保存と濃密化が可能になる」(ES27)と結論づけるのである。

身体という境界を超えて拡がると考えられた「私」はその後さらに、身体そのものの拡大としてとらえられるようになる。すなわち我々の知覚というイマージュの全体、それはすなわち物質世界の全体でもあり得るのだが、それらの全てをも我々の身体の内に入り込むのである。

我々の身体とは、我々の意識がそこに対応している物質である以上、この身体は意識と拡がりを等しくし、我々に知覚される一切のものを包み星々にまで達している。大身体 (le corps immense) に属している他の部分を我々が動かし得るのは小身体 (le corps minime) を介してである。世人は意識をこの小身体の内閉じ込め、大身体のほうを無視するのが常である。有機的に組織された我々の身体は非常に小さなものだが、その表面が我々の現実運動の場所だとすれば、有機的ならぬ我々の巨大な身体は、将来とら得る行動の、理論的に可能な行動の場所だと言える。

(Cf. DS274-275)



結局持続の流れの中にあつて私という存在を保証するものであつたはずの私の身体、真の私が結び付けられるべき「私の」身体を求めていたベルクソンがたどり着くのは、現実生きてゐる我々の小身体ではない。小文字の自我を大文字の自我に熔融させたようにベルクソンは、身体という場においてもまた、我々の小身体を世界全体という大身体の内に解消してしまふのである。

### おわりに

私が真の私であるのは大いなる生命の流れ、持続においてである。その持続の内にあつて私に「私」性を付与するのは身体・物質である。しかしその結果として出現した私とは生命の流れにとつては妥協の産物、低い程度に留まつた生命の停滞に過ぎないとベルクソンは見なしている。他の何ものにも替え難い独自の存在である私の姿を求めるベルクソンの思索は、翻つてそれを物質世界の全体へと、あるいは持続一般の流れへと熔融させることとなるのである。それでは私という個人が存在すること、その私が真の持続に触れていることとは両立しないのであろうか。

確かにベルクソンが描くとおり、私とは私に留まらず、常に私を超えた持続に向かう存在であらう。しかし具体的に生きたこの私というものを、大文字の私のみを求めるべきであるとは考えられない。小文字の私が大文字の私に解消されて

終わるのであれば、存在するのは大文字の私だけであるということになる。しかしながらこの解消するという働きは、解消するものと解消されるものとの二項があつて初めて成立するはずである。解消する大文字の私は、解消され得る小文字の私の独自の存在を許容するのだからではない。

ベルクソンは生命が進化した最高の段階を神秘家に見ている。その神秘家とは、自分が自分とは比較にならない大きな力を持つた存在によつて浸透され、生と一枚になり、その根源力と自己とが不可分であるような存在である。しかしそのような神秘家は、単に神との合一の恍惚にのみ留まるものではない。彼はまた自己の人格がその大いなる力へと吸収されてしまふのではないことをも感じているのである。(Cf. DS224-225) (3) 我々は、ベルクソンが進化の最先端における新しい種の創造とさえ考えているかの神秘家においてさえ、大いなるものと合一しつつも、なお彼自身の人格が保たれていることに注目し、そこから、我々が真に自己自身であることの可能性を問ひ続けなければならない。

### 注

(1) は筆者による補足を、傍点は筆者による強調を表す  
ベルクソンの著作は以下のように略記する

Essai: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P. U. F., 1889 (Quadrige); 1993

MM: *Matière et mémoire*, P. U. F., 1896 (Quadrige); 1990

EC: *L'Évolution créatrice*, P. U. F., 1907(Quadrige): 1941

ES: *L'Énergie spirituelle*, P. U. F., 1919(Quadrige): 1993

DS: *Les deux sources de la morale et de la religion*, P. U. F., 1932

(Quadrige): 1992

PM: *La pensée et le mouvant*, P. U. F., 1934(Quadrige): 1993

(1) 拙稿「ベルクソンにおける自由と行為の問題——自我の二つの解釈を巡って——」、『現象学年報15』、一九九九年、参照。

(2) E・フィンク、「フッサールの現象学における操作的概念」、新田義弘・小川侃編、『現象学の根本問題』、晃洋書房、一九七八年、二七頁、参照

(3) このようなスペイン神秘主義における「暗夜」についてのベルクソンの分析に関しては機会を改めて詳細に検討する必要がある。

(おせき あやこ・京都大学)

## 「哲学の広場」原稿募集

本誌では「哲学の広場」の原稿を募集しています。本頁は全て投稿により構成いたします。読者、研究者、その他すべての「哲学」「倫理学」「思想」などについて真摯に研究、思索を重ねられている個人、団体に開放された表現の場に行きたいと考えております。皆様の積極的な御参加をお待ちいたしております。

### 応募要項

応募資格 なし

### 応募規定

内容 自由(但し「理想」誌の内容に合った哲学、思想等に関する論文)  
枚数 四百字詰原稿用紙 三十枚以内  
ワ・プロ原稿の場合も同様の字数でお願いします。

発表 「理想」各号における掲載により発表に代

えさせていただきます。尚、掲載論文執筆

者には、事前にお知らせいたします。  
当該「理想」五部贈呈により、謝礼に代

えさせていただきます。  
〒270-2231 千葉県松戸市総台六一四―一七

(株)理想社 編集部

TEL 047-366-8003  
FAX 047-366-7301